

Title	シンポジウム「文明語の比較社会史：漢文,オスマン語,中世ラテン語」
Sub Title	On the comparative study of premodern civilisations through languages
Author	坂本, 勉(Sakamoto, Tsutomu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1994
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.63, No.3 (1994. 3) ,p.71(291)- 72(292)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	一九九二年度三田史学会大会
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19940300-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九九二年度三田史学会大会

シンポジウム

「文明語の比較社会史―漢文、オスマン語、中世ラテン語―」

坂本 勉

一九九二年六月二七日に開かれた三田史学会・総合部会のシンポジウムは、鈴木董（東京大学東洋文化研究所教授）、坂口昂吉（本塾文学部教授）、金文京（本塾総合政策学部助教授）、網野善彦（神奈川大学短期大学部教授）の四氏にパネラーをお願いし、私が進行役を引き受けて「文明語の比較社会史」というテーマで行なわれた。

文明語というのは余り聞き慣れない言葉である。大半の人にとってはイメージを結ぶのに苦労するにちがいない。そこでこれを簡単に説明しておく、文明語とは世界史のなかで独自の政治、経済、文化的まとまりをつくってきた幾つかの地域、文明世界において共通語として機能し、口語の段階にとどまらず文語のレベルにまで昇華して何らかの地域的統合に寄与してきた言葉であると理解することができるであろう。

こうした目で世界の言語を眺めわたしてみると、文明語という言葉、名付け方がいいか悪いかは別としてそれぞれの地域、文明世界において突出した役割を果たしてきた言語というものがあることに気づくはずである。西ヨーロッパ世界におけるラテン語、イスラーム世界におけるアラビア語、ペルシア語、トルコ語、中国を中心にした東アジア世界における漢語などがそれにあたる。

こうした文明語がそれぞれの地域においていかなる役割を果たしてきたのか、それを純粋な言語学的側面からではなく、歴史学の面から考えていこうというのが今回のシンポジウムの趣旨であった。

ところで、今、世界には「民族の妖怪」と言ってもいい現象が徘徊している。こうした民族問題の根をさぐっていくと往々にして言語をめぐる対立の問題に突きあた

ることが多い。たとえば、イスラム世界の一国、イラクではアラブ・ナシヨナリズムにもとづく国家体制のもとで言語問題が糊塗されてきたかのように見えるが、一九九一年の湾岸戦争直後のクルド語系住民の蜂起によってアラビア語至上主義の破綻が白日の下にさらされた。

こうした例は経済的のみならず、政治的にも統合を進めているヨーロッパにおいてすら起きている。ベルギーにおけるワロン語系住民とフラマン語系住民との対立は、政体にも波及しついにベルギーが連邦国家に移行したことは記憶に新しい。

言語の問題はかように民族問題に深く関わっている。民族にとってアイデンティティを喚起し、それを持続させていくのに言語が避けて通れない重要な要素の一つであるからである。このため近現代の民族問題、ナシヨナリズム、国家論に興味、関心をもつ人たちは言語の問題を重視し、熱心にこれに取り組んできた。

しかしながら、言語の問題は以上のような近現代における民族と国家の問題としてだけ論じられるべき事柄ではない。近代以前のいまだ領域国家の体裁をなしていない王朝、多民族国家、それらがまとまってつくりあげる地域、文化圏、文明世界において、言語は国民統合のシ

ンボル以外にさまざまな機能を果たしてきた。とくに文明語として括れる言語は行政上の必要から、また宗教的統合の必要からいずれも重要な役割を負わされてきた。

これらの文明語の位相をそれぞれの地域世界において考え、その結果を同じ土俵にのぼらせて比較し、共通点と相違点を明らかにしながらヨーロッパ、イスラム世界、中国における文化の特性を言語面から明らかにしていこうというのがこのシンポジウムの意図したところであった。

シンポジウムは三人のパネラーにそれぞれの立場から報告していただき、その後、網野善彦氏のコメント、フロアーの方々の質問という形で進められた。これらはテープに録音されたが、今回、特集を組むにあたっては諸般の事情があつて原稿をテープからおこすということができず、報告者の方々に改めて原稿をご執筆いただきそれを掲載する方針をとった。このため鈴木董、坂口昂吉、金文京の三氏の報告に対して貴重なコメントをしていただいた網野善彦氏の発言、その他フロアーから寄せられた有益なご意見を割愛する結果になってしまった。この点についてはこの紙面を借りてあらためてお詫びすることにした。